

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：32660

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K20734

研究課題名（和文）台湾における西洋クラシック音楽への歴史人類学的アプローチ

研究課題名（英文）Approaching Western classical music in Taiwan from the perspective of historical anthropology

研究代表者

木名瀬 高嗣（KINASE, Takashi）

東京理科大学・教養教育研究院葛飾キャンパス教養部・准教授

研究者番号：80548165

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近・現代台湾における（広義の）西洋クラシック音楽の受容と社会構造、そしてそれらと人々のアイデンティティとの関係について、とくに2つのテーマ（「台湾社会における「多様性」と「表演芸術」、芸術と大衆文化との接触領域」）を焦点として文化人類学と歴史研究の両面からアプローチすることを目的に、台湾における複数の（公的および民間の）団体・組織の活動についてフィールドワークをおこなった。さらに新型コロナウイルス感染症拡大のため台湾への渡航調査が不可能な時期が長かったことを受け、将来的な展望としていた目論見を前倒しする形で比較研究の比重を拡大し、国内の関連テーマについての調査もおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

西洋由来の「普遍性」を帯びたいわゆる「高級な」文化が非西洋世界に受容され、それぞれの社会固有の文脈において多様性を帯び、ときに人々のアイデンティティ形成にも関わることについては、「普遍」の芸術への志向が強い音楽研究（とりわけクラシック音楽に関わるそれ）はもとより、人間の「文化」に関するあらゆる事象を扱うことを標榜しながらもその成り立ちから土着の「伝統」への志向が根強い（それゆえ「高級な」文化をしばしば等閑視しがちな）文化人類学においてもまた、十分に対象化し得るような理論的視座を欠く境界的な領域であり続けてきた。やや射程が広すぎた観はあるが、そこに光を当てる契機としての意義はあった。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to approach the reception and social structure of (broadly defined) Western classical music and its relationship with people's identity in modern and contemporary Taiwan from both a cultural anthropological and historical perspective, focusing on two themes in particular: (1) 'diversity' and 'performing arts' in Taiwanese society, and (2) contact zones between the 'arts' and 'popular culture'. The research primarily involved fieldwork into the activities of several groups and organizations in Taiwan (some public, some private). In addition, as it was not possible to travel to Taiwan for research due to the spread of COVID-19 for a long time, the comparative research was expanded and research on related topics within Japan was also carried out in order to advance the future prospects of the project.

研究分野：文化人類学

キーワード：表演芸術（パフォーミングアーツ） 台湾 日本 東アジア 西洋クラシック音楽 アイデンティティ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

以下、1、2、3の は申請時に提出した研究計画調書に、また4は各年度に提出した科研実績報告書に基づいて構成した(いずれも字句の一部を改めるなど加筆・修正をしている)。

報告者は2017年5月1日から2018年2月28日までの10ヶ月間、民俗学者の林承緯氏(国立台北芸術大学副教授[現在、同教授])のもとで平成29年度東京理科大学在外研究員として研究活動を行い、かつて 帝国日本 の影響圏にあった地域の内部(つまり、宗主国=日本と植民地だけでなく、個々の植民地相互の関係もそこに含まれる)における 文化 とアイデンティティの動態について戦前期から戦後期(現在をも含む)までを一貫した視野の下に収める枠組みを構想しようと試みた。この当初の具体的な小テーマとしては、エスニック・アイデンティティと(西洋クラシック音楽の受容を中心とした)芸術の2つを暫定的に立てたが、前者は報告者がこれまで研究してきた近・現代アイヌ史に関連し、後者は近年勤務校の授業で扱いつつ研究課題として発展させようと模索してきたものである。

受入機関が国立台北芸術大学であったことから、かねてより関心を寄せていた音楽や演劇などの研究者と交流する機会を得、また国家两厅院(国家表演艺术中心)など芸術関連の公的機関を活用してそれまで関心の薄かった領域(とりわけ台湾独自の発展を遂げて今日に至る歌仔戲や、現在台湾で盛んなコンテンポラリー・ダンスなど)も含めさまざまな「表演芸術」を視野に収める機会を得た。また折しも報告者の滞在中に、南投縣親愛村の原住民青少年少女たちによる弦楽オーケストラ「親愛愛樂」がウィーンで開催された「スマ・クム・ラウデ国際青少年音楽祭」に初参加で優勝を果たし脚光を浴びたことは、台湾における 文化 やアイデンティティと西洋芸術との関係についての大きな示唆となった。さらには、日本統治期台湾における西洋音楽の受容と民俗文化との意外な関係について、日台の祭祀に関する研究を主な専門領域とする林氏の案内によって行った台湾各地での祭礼行事の現地調査を通じ、報告者が中学時代以来親しんだ吹奏楽(管楽、西楽)を媒介とする形で発見した。これらの経験が集約され、台湾における西洋クラシック音楽および「表演芸術」の学際的な研究フィールドとしての可能性、そしてそれが未開拓であり挑戦的な研究テーマたり得ることを確信するに至った次第である。

2. 研究の目的

近・現代台湾における(広義の)西洋クラシック音楽の受容と社会構造、そして人々のアイデンティティとの関係について文化人類学と歴史研究の両面からアプローチする。このことを通じて、日本を含む東アジア地域の「表演芸術」をめぐる学際的な比較研究の足がかりとなり得る実証的な基礎情報を整備するとともに、それらを 文化 のダイナミズムの観点からの確に捉え得るような洗練された理論的枠組みの構築を目指す。

3. 研究の方法

【 申請当初に計画した「研究の方法」】

本研究は、文化人類学的なフィールドワークに基づく現地調査と歴史的な文書資料調査とを接合しつつ、以下の の2テーマについて、とくに西洋クラシック音楽(本研究では管弦楽や歌劇などの正統的なジャンルのみならず、例えば吹奏楽のように芸術音楽と大衆音楽との境界に位置するそれをも含めた広義のカテゴリーとしてこれを扱う)に焦点を当てた検討を行う。研究期間は2年とする。

なお、この研究の遂行にあたり、日本・台湾両地域の文化研究や文化政策に精通しアカデミズムのみならず文化行政の関係者や現地社会のインフォーマントなどに広範なネットワークを有する民俗学者の林承緯氏(国立台北芸術大学教授)を研究協力者とする(とくにテーマ は同氏の協力が不可欠)。林氏は報告者が2017年5月から2018年2月までの10ヶ月間に台湾で在外研究を行った際の受入研究者であり、今日に至るまで密接な連携を保っている。

台湾社会における「多様性」と「表演芸術」

英語のperforming artsからの翻訳語である「表演芸術」は日本ではあまり馴染みのない用語だが、現代台湾においては狭義の舞台芸術のみならず、たとえば原住民の歌謡や舞踊、あるいは華人系の伝統的祭祀におけるパフォーマンスなど、やや緩く広範な指示対象を含んだ概念として文化政策など公式の場面で用いられている。これに深く関連していると考えられるのは、台湾社会における「多様性」である。それは本省人、外省人、客家人、原住民、そして主に東南アジア地域からの移民を中心とした新住民、といった台湾内部のエスニックな構成における多様性

に加え、植民地としての被統治の経験や大陸中国との間に今も続く政治的緊張などの複雑な歴史によっても形作られており、それらが総体として「台湾人とは誰か」「台湾文化とは何か」といったアイデンティティをめぐる問いに深い影を落としている。

このような台湾社会の複雑な歴史、あるいはその結果としての現在の入り組んだコンテクストにおいて、しばしば「普遍的」な高級文化とみなされる西洋クラシック音楽はどのように受容され、どのような表現形態を採り、この地域の文化政策とどのような関係にあるのか。こうしたテーマは文献研究のみならずフィールドワークによっても明らかにされる必要がある。例えば、近年しばしば原住民少年少女たちによって構成される合唱団や楽団が欧州のコンクールなどで高評価を得ていることなどは、台湾における文化やアイデンティティと芸術音楽との関係を考察する上での象徴的な事例として注目されてよいだろう。

芸術 と 大衆文化 との接触領域

ここではとくに吹奏楽（台湾では一般に管楽と称する）が重要な焦点となる。芸術 と 大衆文化 との接触領域に位置する吹奏楽は、軍隊と学校教育に結びついて発展してきたという意味できわめて近代的な性格を持った文化実践である。台湾における初期のそれは、台湾総督府による官製の教育を通じて移入されたものであったが、台湾固有の現象と言えるのは、民俗的な祭礼のなかの神事行列で用いられる鳴り物（現在でも北管や什音といった華人的な伝統楽器による音楽が一般的である）に西洋由来の金管・木管楽器を導入するグループが、早いところでは1910年代から登場していることである。当時こうした音楽は西洋音楽一般を指す「西楽」という語でも呼ばれ、その系譜を引く「西楽団」も現存する。これらについては林氏とともに桃園縣大溪においてインタビューを含む予備的な調査を行ったことがあるが、文献とフィールドワークの両面からより掘り下げた実態解明が必要である。

日本統治期にこうした台湾人自身を担い手とする（つまり、上からではなく下からの）西洋クラシック音楽の普及がなされていたことについては、文化人類学においても音楽史においても重要な考察対象となり得るはずだが、現状ではこのテーマは両者の中間に捨て置かれたままにとどまっている。ちなみに台湾では現在も吹奏楽の活動が盛んであるが、1993年に始まった「嘉義市国際管楽節」のように地域の代表的な文化事業として展開されているイベントも存在する。この「国際」を謳った音楽祭にもまた「台湾人」「台湾文化」をめぐる（すなわちテーマで述べたようなアイデンティティに関する）問題系が強く投影されている。これについては2017年12月からフィールドワークを開始しているが、今後は日本や東アジア地域の類似イベントとの比較を含め更なる調査と検討を行う必要がある。

【途中で変更した点】

新型コロナウイルス感染症の拡大防止措置にともなう日本と台湾との地域間移動の制限により、研究計画の中心を占めていたフィールドワーク遂行は当初計画の2年度では不可能であった。そのため、さらに2回にわたって補助事業期間の延長を申請して認められ、研究期間は合計で4年度となった。台湾との間の移動制限は2022年10月から段階的に緩和されるまで（つまり3年度目の途中まで）続いたが、その間は文献やインターネットなどを利用して収集可能な情報の整理に留まらざるを得なかった。

こうした状況のもと、まだ台湾入境時にビザ取得と隔離措置が必須であった2022年9月には、国家交響楽団（以下、NSO）の招聘により台湾に入境・滞在し同楽団の活動取材したことが契機となって、現地でのフィールドワークが可能となった。このあと台中国家歌劇院（以下、NTT）からも同様の招聘を受け、それらの滞在を利用して上記の「研究の方法」で記した対象についても一通り現地調査をおこなう機会を得たが、研究方法としては当初計画よりも（NSO、NTTを中心とした）公的な組織の動向をメインに追う展開にシフトした観がある。

その間、申請段階で将来的な展望として記していた「日本を含む東アジア地域の「表演芸術」をめぐる学際的な比較研究」を前倒しする形で、科研費とは別に東京理科大学から教員に配分される研究費を利用して日本国内の地方における音楽や舞台芸術の活動を事例とした（同様の問題意識に基づく）調査を並行しておこなった。とりわけ沖縄でのオペラ上演（史）に関する調査が2021年度以降に大きく進展し、結果としてエフォートの多くをそちらに割かれることとなった。

4. 研究成果

2020年度

新型コロナウイルス感染症の拡大防止措置にともなう日本と台湾との地域間移動の制限により、計画していた研究の遂行は困難を極め、結果として初年度に予定されていた現地調査を実施することは不可能であった。そうしたなかで発表された拙稿「台湾表演芸術観察記」（『K』創刊号、2020年9月）は、本研究を構成する基本的な問題意識を開示しつつ近年の台湾における劇場文化の展開について（とくにNTT《ニーベルングの指環》[2016～2019年]に着目して）論じ

た成果である。また、台湾は新型コロナウイルス蔓延の抑止にかなりの程度成功し芸術活動の再開も世界に先んじていたことから、そうした状況について『音楽の友』誌で2度報告をおこなった(2020年11月、2021年1月)。そのうち8月衛武营国家芸術中心(高雄)からインターネットでライブ配信された《トゥーランドット》は、近年の国際的な政情や台湾人意識と深く関わる演出がなされていた点で、とくにテーマの問題系につながる重要な事例であったと言えるだろう。

2021 年度

前年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症による地域間移動の制限によって台湾での現地調査は不可能であった。そうしたなか、「映画『西索米(シソミ) ~人の最期に付き添う女たち~』をめぐるあるいは、台湾吹奏楽史研究のためのメモランダム」(『東京理科大学紀要(教養篇)』54号、2022年3月)を発表した。これは主に台湾の葬儀において演奏される民間の女子楽団「シソミ」に関わる人々の実態に迫ったドキュメンタリー映画の解題を切り口としながら、本研究の立案段階からとくに「研究の方法」に関連する重要な調査対象と位置付けていた台湾の吹奏楽史にアプローチした萌芽的な論考である。「シソミ」の起源と発展に関する言説の混乱した実態が改めて浮き彫りとなり、精緻な現地調査の必要性を再認識した。

このほか、本研究の射程を台湾のみにとどまらない広域的な比較研究へと拡張するための研究活動の一環として、本研究テーマに関連した日本国内の地方における公演の現地調査も複数回おこない、これまでたびたび寄稿している『音楽の友』誌上でそれらの成果および台湾の音楽界の動向について報告した(2021年4月[札幌] 同7月[浦添、南大東] 同8月[遠野] 同11月[台湾] 2022年1月[札幌])。

2022 年度

この年度も前半期までは地域間移動の制限が研究遂行を阻んできた。しかし、台湾入境時にビザ取得と隔離措置が必須であった9月には、NSOの招聘により同楽団の活動を取材し『音楽の友』誌に執筆、さらにこの滞在を利用して現地の研究協力者とともに現地調査(台湾吹奏楽史に関するフィールドワークと資料調査[彰化縣・台中市] 親愛愛楽音楽芸術実験学校と親愛国民小学の訪問・聞き取り[南投市、南投縣])を行った。その後10月から入境制限が段階的に緩和され、12月には日台両地域の国立劇場間における本格的な協働によって実現したNTT《魔笛》公演について、さらにこの滞在を利用して嘉義市国際管楽節について調査を行った(前者については同劇場の招聘を受けて取材、『モーストリー・クラシック』誌に執筆)。また3月には「クラシック音楽と台湾社会」と題し、中央大学人文科学研究所公開研究会で口頭発表した。

このほか、本研究の射程を広域的な比較研究へと拡張するための研究活動の一環として、本研究テーマに関連した日本国内における現地調査も実施し、とくに5月小千谷闘牛場で行われた《カルメン》公演については『音楽の友』誌上で報告した。また沖縄では、南大東島出身のオペラ演出家・粟國安彦の活動と沖縄でのオペラ上演史を回顧するシンポジウム(一般社団法人沖縄オペラアカデミー主催)にコーディネーターとして参画し、研究成果の一部を発表した。

2023 年度

まだ隔離措置が残り通常の入境ができない2022年9月に招聘してくれたNSOの活動については継続的な考察対象としている。2023年度は来日公演(5月) 2022/23シーズン閉幕のセミ・ステージ形式オペラ(7月) 2023/24シーズン開幕公演(9月) 台湾出身の作曲家・江文也の作品を集めたコンサート(10月: NSOの招聘) NTT「遇見巨人」シリーズでのオペラ公演(12月: NTTの招聘) 歳末コンサート(同)に出向き、そのうち来日公演と台中のオペラについては音楽専門誌に批評を寄稿した。また「研究の方法」に関連して、10月には国慶日の関連イベント(日本やアメリカから招聘されたマーチングバンドや伝統芸能のパフォーマンスを含む)を高雄と台北で、12月には台湾5か所を巡演する3年計画のパフォーマンス《默島進行曲》(研究協力者の林氏が製作に参加)の第1回目を埔里で視察した。

2022年度から比較研究の対象に含めている国内の関連テーマについては、南大東島出身のオペラ演出家・粟國安彦の生涯と日本・沖縄のオペラ上演史に関する調査と並行して、4月から『沖縄タイムス』紙上で「オペラ開拓 粟國安彦と沖縄」を連載している(2024年3月末時点で18回)。連載は当初単年度の計画であったが2024年度末まで延長して現在も執筆継続中(2025年3月完結予定)。さらに国外でも香港(6月) シンガポール(7月) ベトナム(9月)でオペラを視察した。なお、国内外で視察した公演の一部については音楽専門誌に批評を寄稿した。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計39件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 2023年4月28日朝刊号
2．論文標題 オペラ開拓 粟國安彦と沖縄	5．発行年 2023年
3．雑誌名 沖縄タイムス	6．最初と最後の頁 18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 313
2．論文標題 台湾フィル、準・メルクル指揮で5月に来日	5．発行年 2023年
3．雑誌名 モーストリー・クラシック	6．最初と最後の頁 79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 2023年5月9日朝刊号
2．論文標題 オペラ開拓 粟國安彦と沖縄	5．発行年 2023年
3．雑誌名 沖縄タイムス	6．最初と最後の頁 17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 2023年5月23日朝刊号
2．論文標題 オペラ開拓 粟國安彦と沖縄	5．発行年 2023年
3．雑誌名 沖縄タイムス	6．最初と最後の頁 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 2023年6月13日朝刊号
2．論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5．発行年 2023年
3．雑誌名 沖縄タイムス	6．最初と最後の頁 13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 2023年6月27日朝刊号
2．論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5．発行年 2023年
3．雑誌名 沖縄タイムス	6．最初と最後の頁 13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 81巻7号
2．論文標題 明解なコンセプトでみせた《ロジェ王》（特別記事「演出家・菅尾友の仕事」）	5．発行年 2023年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 2023年7月28日朝刊号
2．論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5．発行年 2023年
3．雑誌名 沖縄タイムス	6．最初と最後の頁 17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 81巻8号
2．論文標題 いざ、親子で「観る／楽しむ」オペラ体験へ！ サラダ音楽祭2023《子どものためのオペラ『アトランティス・コード』～伝説の島の謎～》	5．発行年 2023年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 2023年8月11日朝刊号
2．論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5．発行年 2023年
3．雑誌名 沖縄タイムス	6．最初と最後の頁 19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 2023年8月25日朝刊号
2．論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5．発行年 2023年
3．雑誌名 沖縄タイムス	6．最初と最後の頁 17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 2023年9月8日朝刊号
2．論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5．発行年 2023年
3．雑誌名 沖縄タイムス	6．最初と最後の頁 13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 2023年10月13日朝刊号
2．論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5．発行年 2023年
3．雑誌名 沖縄タイムス	6．最初と最後の頁 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 2023年10月27日朝刊号
2．論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5．発行年 2023年
3．雑誌名 沖縄タイムス	6．最初と最後の頁 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 81巻11号
2．論文標題 ベトナム王女と長崎商人の恋物語、ハノイで世界初演 日越外交関係樹立50周年記念新作オペラ《アニ ー姫》	5．発行年 2023年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 2023年11月24日朝刊号
2．論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5．発行年 2023年
3．雑誌名 沖縄タイムス	6．最初と最後の頁 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木名瀬高嗣	4. 巻 2023年12月8日朝刊号
2. 論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 沖縄タイムス	6. 最初と最後の頁 13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木名瀬高嗣	4. 巻 2023年12月22日朝刊号
2. 論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 沖縄タイムス	6. 最初と最後の頁 20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木名瀬高嗣	4. 巻 2024年2月9日朝刊号
2. 論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 沖縄タイムス	6. 最初と最後の頁 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木名瀬高嗣	4. 巻 2024年2月23日朝刊号
2. 論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 沖縄タイムス	6. 最初と最後の頁 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 82巻3号
2．論文標題 台中国国家歌劇院でマスネ《サンドリヨン》を上演！ 世界で再演を重ねるロラン・ペリーの人気プロダクション	5．発行年 2024年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 2024年3月8日朝刊号
2．論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5．発行年 2024年
3．雑誌名 沖縄タイムス	6．最初と最後の頁 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 2024年3月22日朝刊号
2．論文標題 オペラ開拓 栗國安彦と沖縄	5．発行年 2024年
3．雑誌名 沖縄タイムス	6．最初と最後の頁 16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 80-7
2．論文標題 新潟・小千谷闘牛場でビゼー《カルメン》を上演 重要無形民俗文化財「牛の角突き」の伝統も盛り込んだ舞台に	5．発行年 2022年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 80-7
2．論文標題 那覇文化芸術劇場なはーとで読売日本交響楽団が初公演	5．発行年 2022年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 巻末7 - 巻末8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 80-8
2．論文標題 笠松泰洋「歌曲集《鳥のように》」を晴雅彦バリトン・リサイタルで東京初演	5．発行年 2022年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 巻末6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 81-1
2．論文標題 地域別に見るアジアのオーケストラ	5．発行年 2023年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 124-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 81-1
2．論文標題 準・メルクル&台湾・国家交響楽団 シーズン・オープニング&台湾国内ツアー	5．発行年 2023年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 311
2．論文標題 台中国家歌劇院が《魔笛》上演	5．発行年 2023年
3．雑誌名 モーストリー・クラシック	6．最初と最後の頁 92-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 54号
2．論文標題 映画『西索米(シソミ) ～人の最期に付き添う女たち～』をめぐって あるいは、台湾吹奏楽史研究のためのメモランダム	5．発行年 2022年
3．雑誌名 東京理科大学紀要（教養篇）	6．最初と最後の頁 155-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 79-2
2．論文標題 沖縄オペラアカデミー、オペラと朗読のコラボレーションによる《蝶々夫人》	5．発行年 2021年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 巻末6-巻末7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 79-4
2．論文標題 男性キャラクターの造形も目を引いた「hitaruオペラプロジェクト」プレ公演《蝶々夫人》	5．発行年 2021年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 巻末8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 79-7
2．論文標題 栗國淳が沖縄で二つのオペラを演出 南大東島では41年ぶりのオペラ公演で「親子共演」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 100-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 79-8
2．論文標題 オペラシアターこんにゃく座が遠野で《遠野物語》を上演	5．発行年 2021年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 巻末8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 79-11
2．論文標題 準・メルクルが台湾国家交響楽団の音楽監督として契約	5．発行年 2021年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 巻末6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 木名瀬高嗣	4．巻 80-1
2．論文標題 JAPAN LIVE YELL project IN HOKKAIDOの《ピーターと狼》でジャンルを超えた協働	5．発行年 2022年
3．雑誌名 音楽の友	6．最初と最後の頁 巻末7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木名瀬高嗣	4. 巻 0 (創刊号)
2. 論文標題 台湾表演芸術観察記	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 K	6. 最初と最後の頁 32-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木名瀬高嗣	4. 巻 78-11
2. 論文標題 台湾・高雄で《トゥーランドット》が観客をほぼフルに収容して上演	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音楽の友	6. 最初と最後の頁 巻末6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木名瀬高嗣	4. 巻 79-1
2. 論文標題 準・メルクルが台湾国家交響楽団の芸術顧問に就任	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音楽の友	6. 最初と最後の頁 巻末2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 木名瀬高嗣
2. 発表標題 第1回オペラシンポジウム「沖縄でオペラを考える ソプラノ歌手本宮寛子と共に振り返る1970～80年代の上演史」コーディネーター
3. 学会等名 第1回オペラシンポジウム「沖縄でオペラを考える ソプラノ歌手本宮寛子と共に振り返る1970～80年代の上演史」(主催：一般社団法人沖縄オペラアカデミー)(招待講演)
4. 発表年 2022年

1．発表者名 木名瀬高嗣
2．発表標題 クラシック音楽と台湾社会
3．学会等名 中央大学人文科学研究所公開研究会（「芸術と批評」チーム）（招待講演）
4．発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織			
	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------